

日～911日で、累積開存率は6カ月で57.1%、1年で42.9%であった。PTAによる合併症は認められなかった。

【考察】PTAは外来で施行でき、患者への侵襲が少ない利点があるが、コストの面や、有効期間が短いという点で問題が残されている。しかし、1回の開存期間は短くとも、繰り返し行うことでシャント寿命の延長が可能であり、糖尿病などでシャント閉塞を繰り返し、外科的再建を度々必要とする症例では、シャントを長期に維持していくために有効な方法と考えられる。

第35回新潟化学療法研究会

日 時 平成8年6月15日(土)

会 場 ホテルイタリア軒

I. 一 般 演 題 I

1) 高齢者の薬剤アレルギー

宇野 勝次・八木 元広(水原郷病院薬剤科)
鈴木 康稔・関根 理(同 内科)

薬剤過敏症疑診患者210例(被疑薬剤708剤)を対象に白血球遊走阻止試験(LMIT)による原因薬剤の同定を行い、加齢と薬剤アレルギーについて検討した。LMITの陽性率は10歳未満と60代にピークを認める二峰性を示し、1,143例の血中リンパ球数と関連した。LMIT陽性患者は加齢と伴に増加し、50～70代に高頻度を示し、投薬患者10,571例の年齢別頻度と関連した。LMIT陽性薬剤は、65歳以上の老年者では若年者に比べ循環器官用薬の頻度が高く、7,642例に処方各薬剤群の年齢別頻度に関連した。LMIT陽性の薬疹患者80例の潜伏期間は、加齢と伴に長くなり、老年者は若年者の2倍以上を示し、リンパ球活性も加齢と伴に低下する結果を得た。したがって、高齢者の薬剤アレルギーは、頻度が高く、起因薬剤として循環器官用薬の頻度が高く、潜伏期間が長い特徴を有する。これは、加齢に伴うリンパ球活性作用、服薬患者数ならびに服用薬剤の変化に起因するものと考えられる。

2) 眼科領域におけるブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌の現況(1992～1994年)

宮尾 益也・阿部 達也
笹川 智幸・飯塚 裕子(新潟大学眼科)
大石 正夫(信楽園病院眼科)

【目的】眼科領域におけるブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌の検出状況について調査した。

【方法】新潟大学眼感染症クリニックで、1992～1994年の3年間に眼感染症患者より非発酵菌が検出された14症例、19株を対象とし、検出状況を検討した。

【結果】1. 非発酵菌は全検出菌2.8%、グラム陰性桿菌の38.0%を占めた。2. 症例は角膜潰瘍5例、慢性涙囊炎3例、慢性結膜炎2例、急性結膜炎、急性涙囊炎、新生児涙囊炎、角膜炎各1例の計14例であった。3. 菌種はAcinetobacter属7株、Pseudomonas属4株、Flavobacterium属、Achromobacter属、Xanthomonas属、Sphingomonas属各1株、同定不能4株であった。4. 非発酵菌単独で検出されたのは全体の11.8%で、他は2～6種の複数菌として分離された。内訳はCorynebacterium 9株、CNS 8株、嫌気性菌5株、 α -streptococcus、他の非発酵菌各3株等であった。

3) 当院における M. avium complex 症の治療

吉川 博子・青木 信樹(信楽園病院)
薄田 芳丸(内科)

【目的】難治性で、確立された治療法のない M. avium complex 症に対して SPFX が有用であるかどうか検討する。

【方法】1993年12月、肺 M. avium complex 症の1症例を SPFX 200 mg 連日服用で治療。その後、4症例を、SPFX 200 mg 隔日処方治療し、効果について検討。

【結果】case 1-case 4 は、臨床的にも細菌学的にも治癒した。

case 5 は、6カ月治療し、臨床的にも細菌学的にも軽快しているが、現在も治療中である。

【考察】全例、臨床的にも細菌学的にも有用であったが、case 5 は、発症当初、気管支に病変の主座があり、他の症例より、菌の陰性化に時間を要した。M. avium complex 症の臨床病型の違いが、治療効果に差を及ぼしている可能性が示唆された。